



世相を反映した二人の退場劇

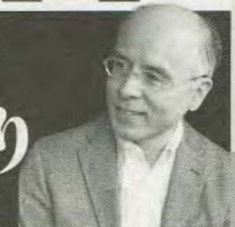
# リベラル社 「寛容」 「不寛容」

# 会の陥穽 特集

# という名の 「容」

国際基督教大学教授

森本あんり



不寛容論  
森本あんり

「不愉快な隣人」と  
どう付き合うか。

「反知性主義」(新潮選書)が話題を呼んだ著者の最新刊

昨年末に「不寛容論」(新潮選書)という本を刊行しました。それで先日、東京五輪組織委員会森喜朗前会長の発言が問題になったとき、産経新聞に「寛容という切り口で考えるとどうなるか」という依頼を受けて、論評を書きました。

その後、同委員会の有識者懇談会メンバーで英国出身のデービッド・アトキンソン氏が、同じように日本人と寛容について書いているのを朝日新聞で読みました。アトキンソン氏によると、「日本人は多神教だから寛容だ」というのは事実ではなく願望だ、ということでした。

わたしも、拙著では統計の数字を示して似たようなことを書きましたが、その先にある結論はちよつと違います。たしかに、日本人は外国人や他宗教に対して警戒心が強いのですが、それは統計が「内心でどう思っているか」を尋ねているからです。でも、いざ実際にそういう人に会うと、と

りあえずはその気持ちを脇において、ていねいな対応をする人が多いでしょう。その使い分けができることこそ、「寛容」だと思ふのです。いきなりお茶の間へ通すわけではないけれど、門前払いせず、まずは土間まで入ってもらおう。

どこの文化でも、多少はこういう「本音」と「建前」の使い分けがあるものです。普通に社会生活を営んでいる人なら、本音だけで生きる、などということはいけません。そういう使い分けを不誠実と断じて、みんなが本音で話し始めたら、おそらく寛容どころではなくなくなってしまふでしょう。実は、寛容という概念を歴史的にたどってみると、この内と外のギャップこそ

「失言」の元総理に浴びせられた激しいバッシング。不適切発言には違いないが、息苦しさも残る。人は心の内まで道徳を強要されねばならぬのか。「寛容」なはずの「リベラル」なぜ「不寛容」を招くのか。「不寛容論」の著者、森本あんり教授が考察する、現代社会の逆説。

そもそも寛容は、心の中心に否定的な感情があるところではか成立しません。たとえば、「私はアイスクリームに寛容である」と言っても、威張る人はいないでしょう。自分が好きでないもの、軽蔑や嫌悪をもつものが、寛容の対象なのです。

森前会長の「女性は話が長い」という趣旨の発言も、もし「話が長いのはよいことだ」という前提で出発していたら、はじめから問題は起きなかつたでしょう。委員会の運営という点から言えば、「話が長いのは悪いことだ」という否定的な評価がまずあり、その後「だから」女性を排除する、

となれば不寛容ですが、「だけど」女性の発言を尊重する、といえれば「寛容」です。ところが、世間の風向きはすぐに変わつてゆきました。当初は「話の長い女性」が焦点だったのに、いつの間にか森氏のような「爺さん連中」をどう扱うべきかという話になっていったのです。すると今度は、年寄りをはりと括りにして悪者扱いすることへの疑問が呈されるようになりました。森氏の立場は、寛容にする側から一気に寛容にされる側へと転じてしまったわけ

## 「より小さな悪」の選択

つまり、寛容というのはもともと少し不愉快な話なのです。自分が評価するものや好きなものは、はじめから受け入れてるので、寛容の対象にはなりません。寛容であるためには、まずは否定的な感情があつて、しかもその上で、それを抑

えつつ相手を肯定する必要があります。否定と肯定の両方があつてこそ、寛容が成立するのです。

現代人は、何となく寛容を美德の一つと考えています。「あなたは寛容な人ね」と言われれば、悪い気はしません。でも、それはつま

り、「あなたは内心では嫌っているのに、それを押し隠して、うわべだけいい顔をしているのね」と言われているのと同じなのです。そんなふうには言いたくないので、あまり嬉しくないでしょう。

寛容には、こうしたパラドックスがいくつも含まれています。これまでの寛容論といえば、何となくつまらないお道徳の話、「よい子はみんな仲良く遊びましょうね」的なお説教にしか聞こえなかつたかもしれませぬ。それは、寛容に本来含まれているはずのこうした「毒」、つまり否定的な要素のことが十分に認識されていなかったからだと思

1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学、東京神学大学院を経て、プリンストン神学大学院修了(Ph.D.)。同大やパーカー連合神学大学院で客員教授を務める。専攻は神学・宗教学。著書に『キリスト教でたどるアメリカ史』『反知性主義』『異端の時代』など。



い。だから寛容なんてもう時代遅れだ、これからは徹底的な平等を論じようではないか、という意見もありました。ポストモダン的な「差異の祝賀」です。「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞの詩のよ

うな感じでしょうか。けれどもそれは、ある程度は共通の地盤に立った上での話です。日本人はこれまで、他国と比べればおおむね均質な社会に生きてきました。でも、これからはそういうわけにいきません。好むと好まざるにかかわらず、自分とは根本的に違う価値観や世界観をもった人々と共存してゆかねばならない時代を迎えます。そのとき必ず問い直されるのが、寛容です。



ウィリアムズの遺した「教訓」は？

をうまく理解できません。特にリベラルなヒューマニズムにとり、人間は無限の可能性をもった存在です。だからしつかり教育して、向上させ進歩させなければならぬ。そういう見方からすると、だらしのない人間にはどうしても不寛容になります。中世では寛容に扱われていた盗人や売春婦や物乞いなどは、厳しく罰して社会に有用な人間に造り変えねばならない、それができなければ放り出せ、ということになります。

その点で聖書は案外現実主義的です。旧約聖書には「罪が門口に待ち伏せしています。それはあなたを慕います。あなたが、あなたをそれを治めねばなりません。」(創世記4・7)と記されています。この世に生きる人は、罪や悪と無縁に生きることはできない。せいぜいできるのは、「一病息災」と言うように、悪を最小限に抑え、何とかなだめすかして共存することです。その理想と現実のギャップを埋

そこで必要なのは、これまでとは少し違った視点からのアプローチです。私は、一般に不寛容な暗黒時代と見なされていた中世に注目してみました。中世の寛容は、「是認しないが許容する」(non approbat, sed permitit) ことと定義されます。たとえば、「ユダヤ人に寛容であれ」ということは、「ユダヤ人を好きになれ」という意味ではありません。ユダヤ人が嫌いなままでもいい。だけど、彼らの存在を認めて、彼らの信仰を尊重し共存しなさい、という意味なのです。

ここに、「本音」と「建前」の区別がはつきり出てきます。心の中では嫌っている。でも、その気持ちを除けず追放という具体的な行為へと表現しない。これが本来の意味での寛容です。当のユダヤ人にとっても、けつして居心地がよいとは言えなかったでしょう。現実には、差別や偏見も少なくなかったはず。しかしそれでも、あからさまな

暴力や抑圧に出ることは禁じられていたのです。寛容にできるのは、そこまでです。寛容は、われわれが考えるような善でも徳でもなく、あくまでも比較の上で「より小さな悪」を選ぶという、計算ずくの実利的な行動指針でした。

中世の寛容を現代的に言い直せば、こんなふうになるかと思えます。「あなたの心の中には、ヘイト(憎悪)

### 人間の底知れぬ闇

心の中で寛容を求めたいというものは「感情の動員」を求めない、ということ。これは、近年のPC(ポリティカル・コレク

トネス)についても言うことができます。もちろん、今日の社会に蔓延している不平等や不正義は、解消してゆかねばなりません。でも、社会常識として何が正しいかという考え方の中身まで事細かに指示されると、どうしても息苦しさを感じてしまいます。たとえそれ

があるかもしれない。それをいっさい消して心から相手を愛しなさい、とまでは言わない。でも、その気持ちをヘイトクライムやヘイトスピーチへと表現することは慎みなさい。――さきに説明したように、はじめから好印象をもっている相手なら、そもそも寛容という事態は成立しません。嫌いだからこそ、寛容が求められるのです。

が正しい主張でも、納得するより先に反感が生じてしまうのです。アメリカでトランプ氏が支持した人々の多くは、いわゆる「リベラル疲れ」を感じていた人でした。客観的なニュース報道を見ようとしてチャンネルを合わせると、テレビ局はたとえ

ばアフリカの病気の子どもを映し出して、視聴者の同情を求めます。まるで「この子をか弱いそうと思わないなら、あなたは人でなし

めるのが、寛容なのです。こういう人間理解には、どこかもの淋しさが深い。結局人は、お互いに心の底まではわかり合えない、ということになるからです。でも、「隠し事は絶対しない

### 是認でも理解でもなく

拙著「不寛容論」では、植民地時代のアメリカで、ロジャー・ウィリアムズというピューリタンが真の寛容を求めて苦闘した生涯をたどりました。この人は本

当にとんでもなく常識外れの頑固者で、一見するとわれわれの思い描く「寛容な人」とは正対面なのですが、そういう彼だからこそ、筋金入りの寛容論者になりました。彼は、アメリカの土地は先住民のものだから、イギリスの国王がそれを与える権利などない、と主張して政府と対立し、マサチューセッツから追放されてしまいます。彼の論理は単純で一貫しています。自分にとって自

でね」なんて、新婚時代くらいのもんです。人が人格をもつということは、秘密をもつということと同義です。完全に透明な理解を求めるのは、愛というより支配に近い気がします。

分の信仰はかけがえのない大切なものだ、ならば他人にとってもその人の信じているものは大切であるに違いない、というのです。だから彼が後に創設したロードアイランド植民地では、どんな宗教の人でも受け入れられるように、宗教と政治とが完全に分けられていました。史上初の政教分離社会です。

といて彼は、相手に合わせて自分の主張を変える、などということはありませんでした。間違っていると思えば、たとえ相手が国王だろうと先住民だろうと、平気でそう言います。ただしそれは、あくまでも礼節を守り、じつと黙って相手の

言葉を待つような対話です。こうした礼節の作法を、ウィリアムズは終生の友であった先住民の態度に学びました。

オリンピックでは、異なる宗教や価値観をもった人々が一堂に会します。なかには、近代西洋が当然の前提としてきた自由や平等という価値を共有しない文化もあります。寛容という価値も、全世界で普遍的に共有されているわけではありせん。そのことを自覚していないと、いわゆる「寛容の強制」という不寛容が生じます。これもパラドックスの一つですが、特にリベラルな現代人は、気をつけないうちに知らぬ間に陥ってしまう危険があります。

日本人が最近気にしている「男女平等指数」の世界比較も、その一つです。もちろん日本の基だしいジェンダー・ギャップは、解消されねばなりません。しかし、オリンピックに集まる世界の国々の中には、そん

だ」と言われているように腹が立つ、というのです。誰を気の毒に思うべきかは、心の中の問題です。そんなことまで、リベラルな知識人に指図されたくない。そうやって自分たちはいつも「無知で時代遅れで無教養な貧しい白人」という侮蔑的な目で見られている。そのことに彼らはうんざりしているのです。こういう絶望感は、トランプ氏の一人や二人がいなくなっても、そう簡単に消えるものではないでしょう。

だから、表にあらわれる言葉や行為については慎みと礼節を求めるときですが、心の中で何を思っているかまでは問ひ詰めない方がよいように思います。人の心には、どんな魔物が棲んでいるかわからない。藪をつけば蛇が出てくるかもしれない。そこは結局のところ、本人と神のみぞ知る倫理空間です。

近代の合理主義は、こうした人間のもつ底知れぬ闇な順位など気にもかけない文化を持つ国もあります。そういう国の人に向かって、わたしたちは何と言えよいいのではありません。あなたの考えは時代遅れだから、さつさと改めなさい、と言うのでしようか。そういう国は、オリンピックにふさわしくない、と排除するのでしようか。多様性の尊重は、口で言うほど易しいことではありません。

寛容は、是認でも理解でもありません。相手を善と認める必要もないし、相手を好きになる必要もない。それでも、相手を拒絶したり排除したりせず、お互いに礼節を守って考えを聞き合い、共存することはできます。

考えてみると、アトキンソン氏が日本社会に受け入れられているのは、まさにこのような日本的寛容の実践の結果と言えるかもしれません。私のこの原稿や日頃の言動も多くのの方に寛容に受け止められることを願っています。